

大原重洋 教授

Prof. OOHARA Shigehiro, Ph.D.

研究分野・領域：小児聴覚障害学、小児コミュニケーション障害学

【プロフィール】

最終学歴：筑波大学大学院
学位：博士（リハビリテーション科学）

【所属学会】

日本聴覚医学会、日本音声言語医学会（評議員）、
日本言語聴覚士協会、日本コミュニケーション障害学会

【キーワード】

聴覚障害（難聴）、コミュニケーション障害、補聴器、療育、ナラティブ

【最近の研究概要】 聴覚障害児のナラティブ形成機序の解明と支援法の開発

聴覚障害児と「ナラティブ」

「ナラティブ」とは、いくつかの文章を筋立てて組み合わせた「お話し」や「物語」のことです。

自分の体験談や空想のお話し、日記、学校の作文などが含まれます。

現代社会の言語活動の多くは、「ナラティブ」の形式で行われているため、その能力の獲得は大変重要な発達課題です。

これまで、聴覚障害児は「ナラティブ」の発達が遅れることは指摘されてきましたが、何がどのように遅れているのか、どうして遅れが生ずるのか、はっきりと分かっていませんでした。

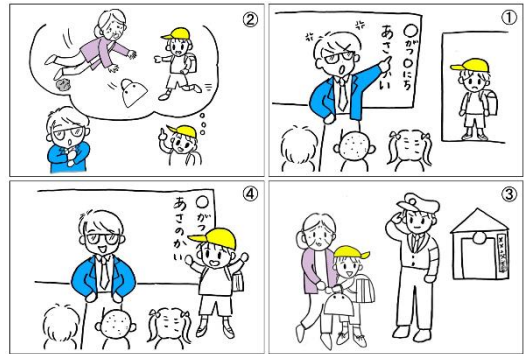
そこで、「ナラティブ」のスキーマ（文法規則）を用いて、何がどのように遅れているのか調べて、子ども同士の会話の分析や心理実験を行なって、遅れる原因を明らかにしました。

「ナラティブ」のスキーマ（文法規則）

ナラティブには、文法規則のように一定のルールがあり、そのルールに従って語られます。

代表的なスキーマに、「ハイポイント法」と「ストーリーグラマー」があります。

聴覚障害児に、右の図版のストーリーを語らせ、「ハイポイント法」で評価したところ、「登場人物の気持ちや感情」、「語り手の視点からの叙述（いわゆるナレーション）」が少ないことが分かりました。

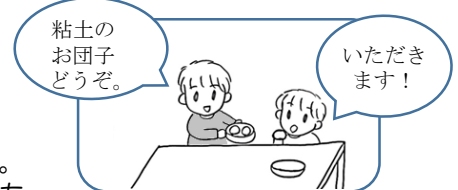


「ナラティブ」が遅れる原因

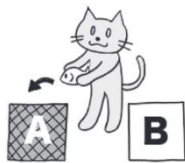
「ナラティブ」が遅れる原因は、大きく2つあります。

1つ目は、保育園で友達同士で言葉を介して遊ぶ経験が少ないことです。一人で話す「ナラティブ」の前に、人と協働して「ナラティブ」を構成する「協同的ナラティブ」の段階（右図）がありますが、聴覚障害児はその段階で十分な学習経験を積んでいないことが分かりました。

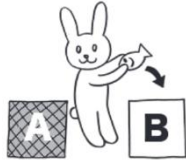
もう1つは、他の人の気持ちや感情を読み取ることが苦手ということです。聴覚障害児に「心の理論」の実験（下図）を行ったところ、自閉症の子どもと同様に、多くの子どもが課題に失敗しました。



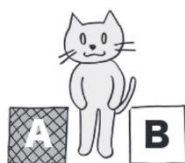
聞こえないと、遊び場面で双方向の会話が成り立ちません。



①ネコが玩具を2つの箱の内、1つに隠して場面から消える。



②その間に、ウサギが現れ別の箱に入れ替えて場面から消える。



③入れ替わったことを知らないネコが戻ってくる。

ネコの視点に立てば、Aの箱を探すというのが正答ですが、多くの聴覚障害児が「Bを探す」と回答します。

「ナラティブ」の指導支援

協同遊び場面に大人が介入し、遊びの仲立ちをするとともに、三人称表現で状況の解説をすること。

表情や仕草から読み取れない、人の気持ちや感情を言葉で具体的に説明すること。

ナラティブの「スキーマ」を意識した言語モデルを提示すること。

【学会発表・論文発表】 <https://researchmap.jp/ooharashigehiro>

大原 重洋他：インクルーシブ環境における聴覚障害児の聞こえの困難と、無線補聴システムの効果に関する検討. AUDIOLOGY JAPAN 63(3):198-205, 2020

Shigehiro OOHARA et al.: Examining factors affecting daily hearing aid use in 0- to 1-year-old infants using device-based time-data logging. 31st World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics in Taipei/Taiwan, 2019

大原 重洋他：聴覚障害児におけるハイポイント法を用いた書記ナラティブ発達の検討. 音声言語医学 59(3):209-217, 2018

